

フィールドワーク教育における教員集団の意識改革 —滋賀県立大学環境フィールドワークⅠでの実践例から—

倉茂好匡

(滋賀県立大学環境科学部)

目 的

滋賀県立大学環境科学部の環境フィールドワークⅠ（以降、FWⅠと略す）は、学部4学科教員19名が協同で運営する学部1年生の必修科目である。この授業運営のため、授業担当者は最低でも年に2回は担当者会議を開き、自らの教育活動の総括点検を行い、改善を図っている。しかし、2002年ごろでは、担当者会議も皆無であり、現在は担当教員全員が参加している授業も当時は「数名の教師におまかせ」していた。現在は全教員が15週すべての授業に参加するのに対し、2002年当時は「6週間の授業しか担当しない教員」が10名いた。そのような教員が、授業への意識を変化させていった過程について報告する。

環境FW授業の特色

滋賀県立大学環境科学部には、開学当時より学部共通基礎科目としてFWが設置されている。1年次・2年次・3年次にそれぞれFWⅠ・Ⅱ・Ⅲが配当され、このうちFWⅠとⅡは必修科目である。このため、FW科目の授業運営のみを目的とした「FW委員会」が学部内に設置されており、教育運営上のサポートのみならず、授業アンケート調査や担当者会議の開催などを実施している。

FWⅠは前期火曜日の3～5時限（13：10～18：00）に行われている。学部4学科の1年生を学科混成4クラス（1クラス約50名）に分ける。教員も4学科の担当教員を学科混成の4グループに分ける。そして、教員グループ（A～D）毎にテーマを決め、3週を1クールとする教育メニューを提供する。学生はクラス毎にA～D各テーマをローテーションして履修する。各クールでは、第1週がテーマ説明の座学主体、第2週はフィールドワーク、第3週にはプレゼンテーションを行う。また全体15週のコースのうち、第1週はFWを受けるための入門の授業であり、この内容は滋賀県立大学環境フィールドワークFW研究会（2009a and b）にまとめられている。第15週には1年生全員が第4クールでまとめた内容を全員の前で発表する「全体発表会」を行い、第14週にはこの準備を行っている。

2002年ごろの授業運営上の問題点

2002年ごろまで、FWⅠの授業運営方法はFW委員会が決定していた。そして、FW委員会の決定事項として、FWⅠの第1週には滋賀県立琵琶湖博物館へ見学に行っていた。また第14週には全体発表会を行い、各クラスの代表者が大講義室で1年生全員の前で口頭発表していた。全体発表会のときなど、各グループの教員は自分のグループの発表が終わればすぐに退席してしまい、他のグループの発表にはほとんど目もくれなかった。また、FW委員会（全8名）の中にFWⅠの担当教員は1名しか存在していなかった。

意識改革のプロセス —FWⅠ担当者会議の実施と意思疎通—

担当教員の中には、琵琶湖博物館見学の教育効果に疑問をもつ者がかなりいた。ちょうどそのころ担当教員の中で「FWIの授業アンケート実施」を提起する声があがり、なんとか実施した。その結果、博物館見学に対して学生たちからも不評であることが判明した。

これがきっかけになって「FWIの授業運営方針はFWI担当者に決定させてほしい」との申し入れをFW委員会に行い、2003年3月に第1回担当者会議を開催した。ところが、この席に当時のFW委員長が出席しなかったこともあり、「俺たちを馬鹿にするのか！」と吼えて2名の先生方が席を蹴ってしまうなど、最悪のムードになってしまった。

しかし、後日に再度担当者会議を開き、第1回授業では「FWを学ぶための心構え」を教える、このため複数のFWI担当者が授業をする、ただしFWI担当者は可能な限り同席する、などが担当者間で決められた。また、第14週の全体発表会にも、担当教員全員が可能な限り同席することも決められた。そして、第1回授業の後にも自発的なアンケート調査を行い、その結果「学生たちはこの授業への満足度が高い」ことに担当教員は自信を深めた。このときより、FW委員会が担当者会議開催の日程調整を行い、実際の授業運営方法は担当者会議で決められるスタイルが作られていった。

2006年には、「ある学生が授業中に教員の注意を無視して川の激流に飛び込む」という事件がきっかけになり、「担当者全員が14週すべての授業に出よう」という提起がなされた。野外活動中の安全管理上の問題から「教員全員が授業に参加する」ことの大切さが認識された。そして、実際に14週の授業すべてに出席することで「自分の参加していない週の授業で他教員がどのような教育活動を行っているか」を知ることになり、これが自らの教育活動を見直すきっかけになった。

2008年には15週の授業を行う決定が全学でなされた。このとき、全体発表会の教育効果について担当者会議で活発な議論があり、「学生全員の前でポスター形式の発表をさせる」ことを決定した。そして、実際にこの発表の様子を全担当教員が見守り、自分たちの目の前で学生達が自らのプレゼンテーション力を上達させていくのを目の当たりにした。

おわりに

FWI担当教員が意識改革していった最大のきっかけは担当者会議の開催にあった。しかも、担当教員全員でその実施方法を検討しなくてはならないもの（初回の授業と最終回の全体発表会）が存在したことも見逃せない。そのうえで「他人任せにせず、全員が必ずこれらの授業に参加する」ことを意思統一した効果も大きかった。これらにより、自分たちで工夫した授業の教育効果を教員が実感できた。そして、実際に学生の成長を実感したとき、担当教員は本気になり、さらに改善が積み重ねられるようになった。「他人任せにしない」「自分たちの授業を自分たちで考える」「教育効果を教員が実感する」の3つが意識改革には欠かせなかった。

引用文献

滋賀県立大学環境フィールドワーク研究会 2009 フィールドワーク心得帖（上）サンライズ出版、彦根、59p.

滋賀県立大学環境フィールドワーク研究会 2009 フィールドワーク心得帖（下）サンライズ出版、彦根、61p.